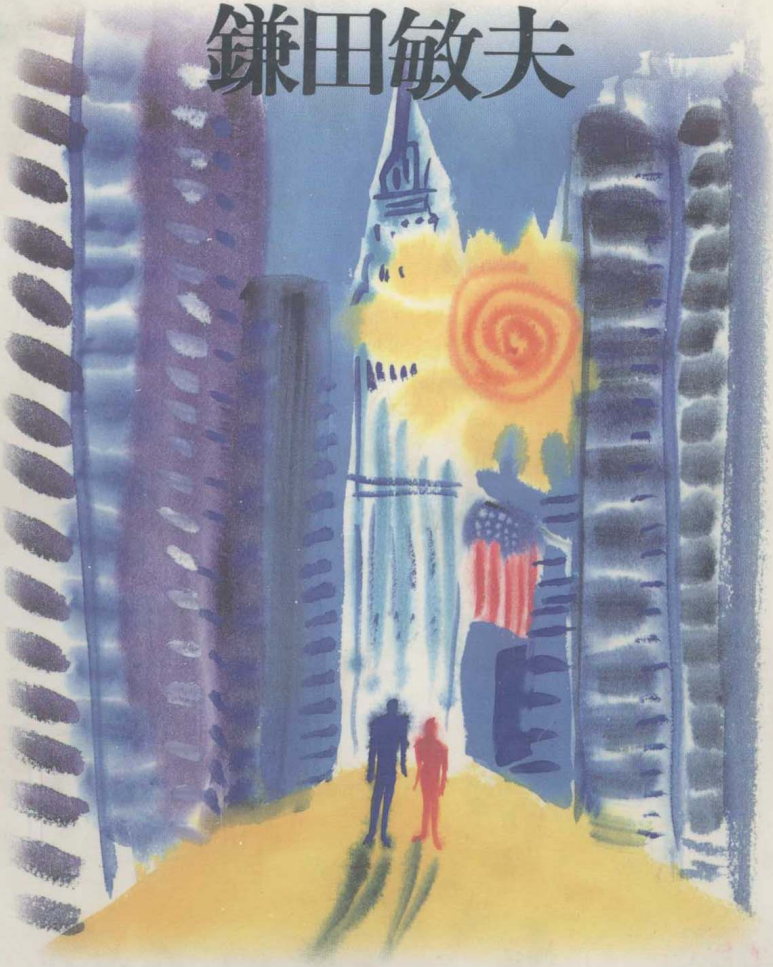
ニューヨーク恋物語

LOVE STORY IN NEW YORK

鎌田敏夫



著者略歴

徳島県出身、早大卒。

シナリオ研究所を出て、井手俊郎氏に師事。

主な作品「俺たちの旅」「俺たちの朝」「土曜ドラマ・十字路」「ちょっと、マイウェイ」「里見八犬伝」「金曜日の妻たちへⅠ、Ⅱ、Ⅲ」「雨の降る駅」「男女7人夏物語」「女と女・華やかな春」「男たちによろしく」「男女7人秋物語」「いこかもどろか」他

ニューヨーク恋物語

1988年12月1日　第1刷発行

定価 1,200円

ニューヨーク恋物語

著　者　鎌田敏夫

発行者　下野　博

編集者　小野　至

発行所　株式会社立風書房

〒一四一

東京都品川区東五反田三の六の一八

電話（〇三）四四七―一一九一

振替東京五―七四四九三

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

装　幀　安彦勝博

装　画　村上みどり

© 1988 T. KAMATA Printed in Japan

ISBN4-651-18506-1 C0095

乱丁本・落丁本はお取替します

ニューヨーク恋物語

LOVE STORY IN NEW YORK

鎌田敏夫

立風書房

会わなければ、よかったのだろうか。

恋は、

いつでも、どこでも、

切ないもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ニューヨーク恋物語　目次

第一章　ブルックリン橋……7
第二章　ウォール街……37
第三章　グランド・セントラル駅……65
第四章　コロンバス通り……91
第五章　独立記念日の夜……117

第六章　ケネディ空港……139
第七章　セントラルパーク……167
第八章　シープスヘッド・ベイ……193
第九章　スタットン・アイランド……219
第十章　自由の女神……243
第十一章　マンハッタン……269
あとがき……294

主な登場人物

田島　雅之
43歳
かつては商社のエリート社員、現在はニューヨークで日本人相手のバーを経営

茅野　明子
28歳
婚約破棄されて、いとこの里美を頼ってニューヨークへ

相川　里美
28歳
ウォール街の証券会社に勤める女性トレイダー

☆

張（チャン）　美姫（ミヒ）
26歳
里美のルームメイト。同じ会社に勤める韓国人OL

坂入　正弘
28歳
日本人のための幼稚園の先生

小池　一徹
26歳
イタリア人経営のグロッサリィ店員

瀬尾リツ子
43歳
田島のかつての恋人。現在は社長夫人

☆

瀬尾さやか
19歳
リツ子の娘。現在コロンビア大学に留学中

おことわり

テレビドラマは制作進行上、流動的な要素があるため、この原作シナリオは、放映されたテレビドラマと多少違いがあります。

第一章　ブルックリン橋

エイトアンドエイト・グロッサリィの表

色とりどりの果物などが並んでいる小さなグロッサリィ。
店の前の通りの鉄の蓋が開いている。
階段があって、地下が、倉庫になっているのである。
地下から、ダンボール箱をかついで上がってくる小池一徹。
電話が鳴っている。
小池、店に入っていく。

グロッサリィ

小池、入ってくる。
イタリア人の店のおやじが、小池を見ると、受話器を差し出して、
おやじ「〈英〉お前に電話だ」
小池、電話に出る。
小池「ハロー（と、言って、すぐ日本語になる）、里美か……何だよ？」

グラハム・マッキンレイ証券

ウォール街にあるビルの上層階。
トレイダー・アシスタントの相川里美が電話をしている。
里美「ちょっと頼まれて欲しいのよ」

グロッサリィ

小池「お前が電話してくると、いつも頼みばっかじゃん」

グラハム・マッキンレイ証券

里美「いっちゃんの頼みだって聞いてあげたことあるじゃない」

グロッサリィ

小池「ないよ。全然ないよ。お前あると思ってんの?」

グラハム・マッキンレイ証券

里美「いとこが、今日、日本から来るのよ。私、忘れてたんだ。お願い、代わりに空港まで迎えに行ってきて」

グロッサリィ

小池「え!?……もう着くじゃないか!?……手が離せないって……おれだって、仕事中だよ」

――――――――――――グラハム・マッキンレイ証券

里美「お願い、一生の恩にきるから……」

――――――――――――グロッサリィ

小池「いままで、何生、恩にきてると思ってんだよ……いとこって、女か？」

――――――――――――グラハム・マッキンレイ証券

里美「そう……私と同い年……え？……可愛いわよ……すっごく可愛い……」

張美姫（チャン・ミヒ）が書類を持ってくる。

里美「サンキュー、ミヒ」

――――――――――――グロッサリィ

小池「ミヒがいるの？」

――――――――――――グラハム・マッキンレイ証券

里美「代わってあげようか……」

――――――――――――グロッサリィ

小池「（照れて）いいよ。ね、その子とミヒと、どっちが可愛い？」

――――――――――――グラハム・マッキンレイ証券

里美「え？……ミヒより可愛いわよ。ミヒより、ずっと美人」

と、美姫を見る。

美姫はなかなかの美人なのである。

――――――――――――グロッサリィ

小池「そうか……（まんざらでもない顔になる）」

――――――――――――グラハム・マッキンレイ証券

里美「（すかさず）お願いね……日航の直行便だから……アキコって言うの……カヤノアキコ……じゃ、頼んだね」

と、切ってしまう。

――――――――――――グロッサリィ

小池「おい……里美！（受話器を見て）仕様がねえなあ……」

――――――――――――ニューヨーク・ケネディ空港

日航機が着陸する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

――――――グラハム・マッキンレイ証券・エレベーターホール

里美と美姫が来る。

里美「日本の国内だって、一人じゃ旅行できないような女なのよ……何だって、ニューヨークくんだりまで一人で来たりするんだろ」

美姫「〈英〉仲がいいの、里美と？」

里美「仲なんかよくないわよ。同い年のいとこなんだけどね、私とは全然性格が違うの……人に説教するのが好きでね……六つくらいの時から、私は説教されてたわよ」

美姫「セッキョウ？」

里美、口をパクパクする手つきを、美姫に向かってしてみせて、

里美「ちょっとここに座って。こんなことじゃ、ダメじゃないの、あなた」

美姫、笑う。

里美「できるだけ早く追い返すから……あんなのが一緒だと、うっとうしくてしょうがない」

――――――ケネディ空港・到着ロビー

到着機の乗客が出てくる。

大きなトランクを引きずりながら、茅野明子が出てくる。

地味なスーツに眼鏡をかけている明子。

出迎えの人たちが、大勢いる。

単身赴任の父親に会いに来て、再会を喜びあっている妻や子供たちもいる。

さまざまな迎えの風景の中で、ジーンズにTシャツ、サマージャケットの袖をまくりあげた小池が、首を伸ばして、出てくる乗客を見ている。

美人のいとこと聞いて、結構気合が入っているのだ。

明子が前を通るのだが。小池は目もくれない。

美人が降りてきて、小池、声をかけに行く。

明子もロビーを見回している。

迎えに来ているはずの里美の姿がないのだ。

明子、キョロキョロとしている。

小池も、キョロキョロとしている。

また美人を見つけて、声をかけに行ったりしている。

＊

乗客が出ていって、ロビーは少しガランとしてきている。

スチュワーデスに連れられた一人旅の子供が、現地の迎えの人に無事とどけられている。

そんな光景を見ながら、明子がポツンと立っている。

小池も、ポツンと立っている。
小池、明子に気づく。
身に余るような大きなトランクをしっかりと脇に置いて、不安そうな顔で立っている明子。
小池、信じがたい顔で明子のそばに行く。
小池「アキコ？」
明子「（いきなり言われて）え？」
小池「カヤノアキコさん？」
明子「ええ」
小池「（もう一度明子の全身をジロリと見て）お前かよ……（はっきりと落胆を声に出す）」
明子「……（ムッとする）」

走るイエローキャブの中

小池と明子が乗っている。
明子「里美はどうして来ないの！」
小池「忘れてたんだってよ」
明子「忘れてた!?……必ず迎えに来るって電話で約束したのよ。手紙も出したのよ。それを忘れるって、いったいどういうこと！」
小池「おれに言ったって知らないよ」
明子「どうして里美に行きなさいって言わないの！　約束したことは守らないといけないって、どうして言わないの！」
小池「……（うるさい女だなあという顔で、明子を見る）」
明子「男の人が甘やかすから、里美のチャランポランな性格がいまだに直らないんじゃないの！」
明子が、あんまりうるさいので、いやみのひとつも言いたくなってくる。
小池「里美がね、お前のことを、すっごく可愛いって言ったの。すっごい美人だって言ったの。おれ、騙されて来たの」
明子「……」
小池「あーあ、来るんじゃなかったよなあ……」
と、窓の方を向いて溜め息をつく。
明子「……（何て男だろうという顔で見る）」

道

郊外の殺風景な道を走るイエローキャブ。

ブルックリンの道

イエローキャブが走っていく。
川の向こうにマンハッタンのビルが見えている。

マンハッタン

林立する高層ビル。

―――――――――――――――――――コロンバス通り

道に椅子を並べたカフェが、いくつも出ている。

―――――――――――――――――――カフェテラス

田島雅之が、新聞に目を通しながら、一人で軽食をとってコーヒーを飲んでいる。
初夏の日差しが快い。
田島、ニューヨークの新聞のほかに、地元の日本語新聞にも目を通している。
田島が、新聞を閉じて、ウェイターに会計を命じる。
会計を終えて、立っていく田島。
別のテーブルの脇を通る時に、田島の持っていた新聞が、ケチャップの瓶に触れてしまう。
瓶が倒れて、そのテーブルにいた日本人の若い女（瀬尾さやか）の洋服にケチャップがこぼれる。
さやか「あ……」
と、立ち上がる。
白いワンピースに、赤いケチャップがかかっている。
田島「〈英〉ごめん……」
一緒にいた友達が、
友達「大丈夫、さやか？」
と、テーブルにあったナプキンで、ケチャップを拭く。
友達の言葉を聞いて、田島の言葉も日本語になる。
田島「ごめん……」
友達が、ナプキンに水をつけて拭くが、白いワンピースなので、どうしても残ってしまう。
田島「旅行に来てるの？」
さやか「いえ、学生です」
田島「そうか……ちょっと待って……ちょっと、待って」
と、行く。

―――――――――――――――――――カフェテラス

田島が、ブティックの袋を抱えて、さやかのところにもどってくる。
田島「これに着替えろよ」
と、袋の中から白いワンピースを出す。
さやか「……？」
田島「それじゃ、遊びにも行けないだろ」
さやか「……」
田島「フリーサイズだから、大丈夫だよ」
さやか「……」
田島「悪かったね」
と、行ってしまう。

――表の道――

田島が行く。
さやかが追いかけていく。
さやか「あの……」
田島、振り返る。
さやか「こんなのいただいても困ります」
さやかは手にワンピースを持っている。
なかなか洒落たワンピースなのである。
田島「きっと似合うよ」
と、笑って行ってしまう。
さやか「……（見送っている）」

――ブルックリン橋（夕）――

里美が、ハイヒールをスニーカーにはきかえて、背筋をしっかりと伸ばして足早に歩いてくる。

――ブルックリンの道（夕）――

里美が歩いてくる。

――ブルックリン・ハイツ（夕）――

五階建てくらいの古いアパートが並んでいる。
古いがなかなか洒落た建物である。
その一棟のアパートで明子が、トランクをしっかりと抱え込んで、一人階段に座っている。
里美が帰ってくる。
明子「里美！」
と、立ち上がる。
里美「ウエルカム」
明子「何がウエルカムよ……ここで、いったい、何時間座ってたと思ってるのよ……道を通る人はジロジロ見ていくし、アパートの人は変な顔で見ていくし、生きた心地がしなかったわよ！（うっぷんを晴らすように喋りまくる）おまけに、オシッコがしたくなるし……」
里美「（興味を持って）どうしたの？」
明子「仕方がないから、そこの公衆トイレまで荷物を引きずっていったわよ！」
里美「あんたにしては、よくできたじゃない？」
明子「空港まで迎えに来るって言ったじゃないの、里美。あんなに念を押したじゃないの！」
里美「（ケロッとした顔で）迎え、行ったでしょ？」
明子「何、あの男！……ここまで送ってきて、仕事だって、さっさと行っちゃったわよ」
里美「あら、そう……」
明子「あら、そうじゃないの！　ニューヨークにいると、みんなあんなふうにいいかげんになるの！」
里美、相手にしないで、鍵を開ける。
明子「里美、約束したことはね……」

里美「分かった……分かった……」
明子「あなたは昔から……」
里美「分かった、分かった」
と、ドンドン入っていく。

階段

四階まで階段が続いている。
里美、ドンドン行く。
明子は、大きなトランクをさげて、やっとこさで上がっていく。
明子「里美！」
里美「分かった、分かった！」
明子「持ってよ」
里美、明子を見て、降りてくる。

階段

里美と明子が、二人がかりでトランクを持ち上げていく。
里美「自分で持てないような荷物持ってくるんじゃないの」

里美の部屋の前

里美、キイを二つ開ける。
中に入っていく里美と明子。

リビング

里美と明子が来る。
リビングから、川向こうのマンハッタンのビルが見えている。
明子「ちゃんと生活できてるの、里美？」
里美「いいとこでしょ、ここ」
部屋はいいが、かなり乱雑に散らかっている。
明子「おばさんが心配してたわよ」
里美「ふーん」
明子、キッチンをのぞく。
酒瓶がいっぱい転がっている。
明子「何、これ？」
里美「昨夜、女二人で酒盛りしたの……時々カツを入れないとやってられないからね」
と、自分の部屋の方に行く。
明子、ついていく。

里美の部屋（夕）

里美と明子が入ってくる。
こちらもかなり乱雑である。
明子「何、これ？」
里美、脱いだ上着をそのへんに置く。
明子「脱いだものを、ちゃんとかけないから、だんだん

こうなるんじゃないの！……ハンガーは？」
散らかっている衣服の中から、着替えを探しながら、
里美「うるさいのが来たね……」
明子「里美、ちょっとここに座って。こんなことじゃダメじゃないの、あなた」
里美、着替えを持って、逃げるように出ていく。

―――リビング

明子が来る。
里美、キッチンからビールを出してきて飲む。
里美「飲む？」
明子「まだ明るいじゃないの」
里美「いつ帰るの？」
明子「来たばかりじゃないの！」
里美「何があったの？」
明子「……」
里美「何かあったから、ニューヨークに来たんでしょ？」
明子「私は、里美のお母さんに、様子を見てきてくれって頼まれたのよ」
里美「ウソ……国内旅行も一人じゃできないあなたが、そんなことでニューヨークくんだりまで来るわけないじゃないの」
明子「……」
里美「何があったのよ」
明子「……」
里美「（明子の様子に、これは、何かあったなと面白くなってきて）何があったのよ」
明子「……」
里美「言いなさいよ」
と、つつく。
明子「……」

―――アパートの前（夜）

タクシーが止まる。
美姫が降りる。
何かブツブツ言いながら、アパートの方に歩いてくる。

―――中の階段（夜）

美姫が、階段を上がっていく。
美姫「〈韓〉くやしい！」
突然大きな声で叫ぶ。

―――リビング（夜）

明子と里美が、テーブルで食事をしている。
玄関の開く音がして、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co